問題の要約と設定

本問は、平安時代後期の擬古物語である【文章Ⅰ】（『在明の別』）と、平安時代中期の物語である【文章Ⅱ】（『源氏物語』若紫）の二つの古文を比較しながら読解する問題です。

設問では、古文特有の重要語句の意味、敬語の種類と敬意の方向の判別、そして二つのテキストにおける「もののけ」の描写の共通点と相違点を正確に読み取ることが求められます。

重要な語句・文法事項

【文章Ⅰ】

- いはけなくより：幼い頃から。
- なかなか：かえって。むしろ。
- 呼ばひののしる：大声を上げて叫び続ける。
- 給へり：
- 聞こえ：
- 給ひ：ハ行四段動詞「給ふ」の連用形。尊敬語。

> 父大臣、かくはあらず、いかでかあべからむと、泣く泣く b 聞こえ c 給ひければ、

【口語訳】父の大臣は、このままでは済まない、どうすればよいのだろうかと、泣く泣く申し上げなさったところ、

【文章Ⅱ】

- 調ぜられて：祈祷によって退散させられて。
- 心憂き：つらい、情けない。

ステップバイステップ解説

問1

Step 1: 傍線部・設問箇所の分析

傍線部(ア)「いはけなくより」、(イ)「なかなか」、(ウ)「呼ばひののしる」の文脈に即した現代語訳を問う問題です。

Step 2: 文脈の把握と根拠の特定

（ア）「いはけなくより、ただ、いまいましくのみ見えたまへば」

「～より」は起点を表す格助詞なので「幼いころから」となります。

（イ）「なかなかえ思ひ放たず」

ここでは、見捨てようとしても「かえって」見捨てることができない、という文脈になります。

（ウ）「小き童に乗り移りて呼ばひののしるほどに」

二つの語が複合し、童に乗り移ったもののけが大声で叫び騒ぐ様子を表しています。

Step 3: 解答の導出と検証

各語句の意味に最も合致する選択肢を選びます。

（ア）= 2

（イ）= 1

（ウ）= 3

問2

Step 1: 傍線部・設問箇所の分析

波線部a「給へり」、b「聞こえ」、c「給ひ」の敬語の種類と敬意の方向の組み合わせを問う問題です。地の文における敬語の基本ルールを適用します。

Step 2: 文脈の把握と根拠の特定

a 「山ノ座主、慌て参りたまへり。……何ばかり祈り a 給へりとも見えで、」

動作の主体は「山ノ座主」です。

したがって、作者から山ノ座主への尊敬語となります。

b・c 「父大臣、かくはあらず、いかでかあべからむと、泣く泣く b 聞こえ c 給ひければ、」

「聞こえ」は謙譲語で、動作の主体は「父大臣」、申し上げる相手（客体）は祈祷を行っている「山ノ座主」です。

したがって、bは作者から山ノ座主への謙譲語です。

「給ひ」は尊敬語で、動作の主体は「父大臣」です。したがって、cは作者から父大臣への尊敬語です。

Step 3: 解答の導出と検証

これら全てを正しく説明している選択肢は 1 のみです。

[問2] = 1

問3

(i) 空欄Xについて

Step 1: 傍線部・設問箇所の分析

生徒Dの「【文章Ⅱ】では、童に移されたもののけが、X のだと思います。」の空欄Xに入る記述を選びます。【文章Ⅱ】における「もののけ」の行動理由を読み取ります。

Step 2: 文脈の把握と根拠の特定

【文章Ⅱ】の後半で、もののけ（六条御息所）は次のように語っています。

> いにしへの心ありてここへかく出で来りならむは、ものの苦しさを見過ぐさで、つひに現れぬるこそ。

【口語訳】昔の愛情があってここへこのように出て来たのならば、もののけ（として修法を受ける自分）の苦しさを見過ごすことができず、ついに正体を現してしまったのだなあ。

つまり、自らの正体を隠しておきたかったが、祈祷（調伏）による苦しさに耐えかねて姿を現してしまった、ということです。

Step 3: 解答の導出と検証

この内容に合致するのは選択肢 4「自分の霊がもののけとなって乗り移っているとは知られたくなかったので、祈祷のいとわしい苦しさを見過ごすことができずに姿を現してしまった」です。

[i] = 4

(ii) 空欄Yについて

Step 1: 傍線部・設問箇所の分析

生徒Cの「和歌の表現から考えてみませんか。『問はずがたりにうちもやうやういひしるける』とありますよ。だから、これは Y と考えられます。」の空欄Yに入る記述を選びます。

Step 2: 文脈の把握と根拠の特定

【文章Ⅰ】における和歌とその直前の描写を確認します。

> 問はずがたりにうちもやうやういひしるける、
> 思ひきやありし昔をふりすててかからむものと今は知るらむ

【口語訳】聞かれもしないのにだんだんと口走ったのは、

思っただろうか、昔の（私への）愛情を振り捨てて、（私が）このような（もののけという）ものになるとあなたは今知っているだろうか

大君は、左大臣が自分を捨てて女君と結ばれたことへの恨みからもののけになりました。生徒Cは「問はずがたり」という表現から、大君が自らの意志（あるいは抑えきれない思い）で、その恨みを左大臣に分からせようと口走ったと解釈しています。

Step 3: 解答の導出と検証

この解釈に合致するのは選択肢 3「大君の和歌で、左大臣への愛情を裏切られたことを恨んでいて、その思いの丈を左大臣に分からせようとしている」です。

[ii] = 3

(iii) 空欄Zについて

Step 1: 傍線部・設問箇所の分析

生徒Dの「和歌の前後も考え合わせると、【文章Ⅰ】では、Z。」の空欄Zに入る記述を選びます。【文章Ⅰ】における大君の行動とその後の周囲の反応をまとめます。

Step 2: 文脈の把握と根拠の特定

【文章Ⅰ】の該当箇所を確認します。

> 大君、我と心づきて、いとあさましと思ふに、いとど心迷ひて、まづ、人に見えじと引きかづきて、いとあはれに泣きゐたまへり。

【口語訳】大君は、自分で（自分がもののけになっていることに）気づいて、たいそう驚きあきれるとともに、ますます心が乱れて、まずは、人に見られまいと着物を頭からかぶって、たいそう悲しそうに泣いていらっしゃった。

大君は自ら正気に戻り、恥ずかしさから姿を隠しました。しかし、その後に和歌を「問はずがたりに」口走ってしまったため、左大臣や父大臣に自分がもののけの正体であることがばれてしまいました。

Step 3: 解答の導出と検証

この一連の流れを正確に説明しているのは選択肢 4 です。「大君が自らもののけの正体であることを口走ってしまったため、気づかれないように隠れていたのに左大臣や右大臣にばれてしまっていますね。大君はもののけから解放されて我に返った後、正気を取り戻して恥ずかしそうにしています」という記述が本文と完全に合致しています。

[iii] = 4

解答と総括

[ア] = 2

[イ] = 1

[ウ] = 3

[問2] = 1

[i] = 4

[ii] = 3

[iii] = 4

誤答選択肢が不適切な理由：

- 問3(i)：1は「周りの者が去って～」が本文にない記述です。2は大君の話が混ざっており不適切です。3も「長年続く恨み～」「大君は～」という記述が【文章Ⅱ】のもののけ（六条御息所）の行動説明として不適切です。

- 問3(ii)：1と2は「もののけの和歌」としていますが、「問はずがたりにうちもやうやういひしるける」の主語は大君本人であり不適切です。4は「熱でうなされる苦しさ」が和歌の内容と合致しません。

- 問3(iii)：1は「死を覚悟して出家を決意」が本文にない記述です。2は「女君の身代わりとして」が不適切です。3は「他の人を装って見せようとしていた正体が～暴かれた」が、「我と心づきて（自ら我に返って）」という本文の記述と矛盾します。

語句解説

いはけなし

- 意味: 文脈における意味は「幼い頃から」。一般的な意味としては、年齢が幼いこと、また、態度や考え方が子どもっぽく未熟であることを表す形容詞（ク活用）である。

- 用法: 年齢的な幼さだけでなく、無邪気で頼りない様子や、かわいらしい様子を表す際にも用いられる。類義語の いとけなし もほぼ同様の意味で用いられるが、いはけなしの方が精神的な未熟さを含むニュアンスを持つことがある。

- 例文:
- 原文: いはけなくより、ただ、いまいましくのみ見えたまへば
- 口語訳: 幼いころから、ただただ、不吉にばかりお見えになるので

なかなか

・意味：文脈における意味は「かえって」「むしろ」。一般的な意味としては、中途半端なさまや、何もしない方がマシである状態（かえって〜しない方がよい）を表す副詞・形容動詞である。

・用法：現代語の「なかなか（非常に、思いのほか）」とは意味が大きく異なるため、古文単語として最重要レベルの語である。状況が良くなると思ってやったことが裏目に出た場合や、予想に反して逆の結果になる場合に用いられる。なかなかなり
という形容動詞の形でも頻出する。

・例文：

・原文：なかなかえ思ひ放たず

・口語訳：（見捨てようとしても）かえって見捨てることができない

呼ばふ

・意味：文脈における意味は「大声で呼び続ける」。一般的な意味としては、①呼び続ける、②求婚する（言い寄る）の二つの主要な意味を持つハ行四段活用の動詞である。

・用法：動詞 呼ぶ に、反復・継続を表す接尾語 ふ が付いてできた語である。「求婚する」という意味は、かつての結婚形態において、男性が女性の家の前で名前を呼び続けて求愛したという風習に由来する。今回は「呼び続ける」の意味である。

・例文：

・原文：小き童に乗り移りて呼ばひののしるほどに

・口語訳：小さな童に乗り移って大声で叫び騒ぐうちに

ののしる

・意味：文脈における意味は「大声で叫び騒ぐ」。一般的な意味としては、①大声で騒ぐ、②評判になる（うわさになる）、③勢いが盛んである、という意味を持つラ行四段活用の動詞である。

・用法：現代語の「罵る（悪口を言う）」という意味合いで使われることは古文では少なく、単に声が大きい状態や、世間がワイワイと騒いでいる状態（評判）を表す。本問では呼ばふ と複合して 呼ばひののしる
となり、手がつけられないほど大声で叫び回るもののけの様子を表現している。

・例文：

・原文：小き童に乗り移りて呼ばひののしるほどに

・口語訳：小さな童に乗り移って大声で叫び騒ぐうちに

給ふ（たまふ）

・意味：文脈における意味は、尊敬語として「お～になる」「～なさる」。四段活用と下二段活用で意味が異なり、ハ行四段活用は尊敬語、ハ行下二段活用は謙譲語（～です・～ます）となる。

・用法：本文の「給ひ」や「給へり」はすべてハ行四段活用であるため、尊敬の補助動詞として機能している。古文において最も頻出する敬語であり、地の文では作者から動作主体への敬意を表す。

・例文：

・原文：泣く泣く聞こえ給ひければ

・口語訳：泣く泣く申し上げなさったところ

聞こゆ

・意味：文脈における意味は、謙譲語として「申し上げる」。一般的な意味としては、①聞こえる、②世間に知られる・評判になる、③理解できる、④申し上げる（「言ふ」の謙譲語）がある。ヤ行下二段活用。

・用法：動詞 聞く に、自発や受身を表す助動詞 ゆ が結びついてできた語。手紙を「差し上げる」という意味や、補助動詞として「～申し上げる」という意味でも多用される。本問では本動詞として用いられ、目下の者（父大臣）から目上の者（山ノ座主）へ言葉をかける行為をへりくだって表現している。

・例文：

・原文：いかでかあべからむと、泣く泣く聞こえ給ひければ

・口語訳：どうすればよいのだろうかと、泣く泣く申し上げなさったところ

調ず（ちょうず）

・意味：文脈における意味は「祈祷によって（もののけを）退散させる」。一般的な意味としては、①加持祈祷して悪霊を退散させる、②調合する・作る、③こらしめる、という意味を持つサ行変格活用の動詞である。

・用法：仏教・密教用語の「調伏（ちょうぶく）」に由来する。悪霊や怨霊を呪術的な力で打ち負かし、患者の体から追い出す行為を指す。調ぜられて
と受身の形になることで、もののけ側が苦痛を受けている状況を表している。

・例文：

・原文：調ぜられて、いと苦しげに泣きわびて

・口語訳：祈祷によって退散させられて、たいそう苦しそうに泣き悲しんで

心憂し

・意味：文脈における意味は「つらい」「情けない」。自分自身の境遇や他人の態度に対して、心がふさいで憂鬱であるさまを表すク活用の形容詞である。

・用法：「心」＋「憂し」から成る語。恋愛において相手が冷たいときや、思い通りにならない不本意な状況に置かれたときの嘆きを表す際によく用いられる。類義語の 憂し も同様の意味を持つ。

・例文：

・原文：さらに心憂きことと

・口語訳：決してないつらいことだと

問はずがたり

・意味：相手に尋ねられもしないのに、自分から勝手に語り出すこと。

・用法：心に秘めていた強い思いや抑えきれない感情が、無意識のうちに、あるいは衝動的に口をついて出てしまう状況で用いられる。本問では、もののけから解放されて正気に戻ったはずの大君が、左大臣への強い恨みを抑えきれずに和歌として口走ってしまった場面で使われている。

・例文：

・原文：問はずがたりにうちもやうやういひしるける

・口語訳：聞かれもしないのにだんだんと口走ったのは

心づく

・意味：文脈における意味は「我に返る」「正気に戻る」。一般的な意味としては、①気がつく、②意識を取り戻す、③思いを寄せる、などがある。カ行四段活用の動詞。

・用法：もののけに取り憑かれていた状態や、気を失っていた状態から、自分の意識を取り戻す場面でよく使われる。

・例文：

・原文：大君、我と心づきて、いとあさましと思ふに

・口語訳：大君は、自分で正気に戻って、たいそう驚きあきれるとともに

あさまし

・意味：文脈における意味は「驚きあきれる」。一般的な意味としては、①驚きあきれるばかりだ、②情けない・嘆かわしい、③見苦しい、などを表すシク活用の形容詞である。

・用法：予想外の事態に直面して、言葉を失うほど驚く心理状態を表す。現代語の「浅ましい（品性下劣だ）」という意味で使われることは古文では少なく、まずは「驚く」という意味で捉える必要がある。

・例文：

・原文：我と心づきて、いとあさましと思ふに

・口語訳：自分で正気に戻って、たいそう驚きあきれるとともに

心迷ふ

・意味：心が乱れる、どうしてよいか分からず戸惑う。ハ行四段活用の動詞。

・用法：悲しみや恥ずかしさ、あるいは驚きによって、平常心を失っている状態を表す。本問では、自分がもののけとして振る舞っていたことに気づき、激しい羞恥心でパニックに陥っている大君の様子を描写している。

・例文：

・原文：いとあさましと思ふに、いとど心迷ひて

・口語訳：たいそう驚きあきれるとともに、ますます心が乱れて

引きかづく

・意味：着物などを頭からすっぽりとかぶる。カ行四段活用の動詞。

・用法：動詞 かづく は、四段活用だと「（自分が）かぶる」、下二段活用だと「（人に）かぶせる」という意味になる。恥ずかしさから身を隠そうとしたり、悲しみで泣き伏したりするときに、衣を頭からかぶる行為を指す。

・例文：

・原文：まづ、人に見えじと引きかづきて

・口語訳：まずは、人に見られまいと（着物を）頭からかぶって

あはれなり

・意味：文脈における意味は「悲しそうに」。一般的な意味としては、しみじみとした情趣がある、気の毒だ、かわいらしいなど、心が動かされる状態全般を表すナリ活用の形容動詞である。

・用法：文脈によってプラスの意味（すばらしい、愛おしい）にもマイナスの意味（悲しい、気の毒だ）にもなるため、前後の文脈から判断する必要がある。本問では「泣きゐたまへり」とあるため、悲痛な様子を表す。

・例文：

・ 原文: いとあはれに泣きゐたまへり
・ 口語訳: たいそう悲しそうに泣いていらっしゃった

文法解説

完了・存続の助動詞「り」

・ ルール: 動作の完了（〜た、〜てしまった）や、動作の結果の存続（〜ている、〜てある）を表す。

・ 活用・接続: ラ行変格活用と同じ活用（ら・り・り・る・れ・れ）をする。接続は非常に特殊で、サ行変格活用動詞の未然形、および 四段活用動詞の已然形 にのみ接続する。（これを覚えるための暗記法として「サ未四已（さみしい）」や「エ段に接続する」という覚え方が有名である）。

・ 例文:
・ 原文: 何ばかり祈り給へりとも見えで
・ 口語訳: どれほど祈祷なさっているとも見えずに
・ 注意点: 完了の助動詞「たり」と意味はほぼ同じだが、接続が異なるため識別の問題として頻出する。本問の「給へり」は、ハ行四段動詞「給ふ」の已然形「給へ」に「り」が接続した形である。

敬語の種類と敬意の方向（地の文）

・ ルール: 古文の敬語には 尊敬語（動作の主体を高める）、謙譲語（動作の客体・受け手を高める）、丁寧語（聞き手・読者を高める）の3種類がある。地の文（会話文や手紙文以外の部分）において、敬語を使用しているのは作者である。

・ 敬意の方向:
・ 地の文における 尊敬語： 作者から → 動作の主体（〜する人）への敬意。

・ 地の文における 謙譲語： 作者から → 動作の客体（〜される人）への敬意。

・ 例文:
・ 原文: 父大臣、泣く泣く聞こえ給ひければ
・ 口語訳: 父の大臣は、泣く泣く申し上げなさったところ
・ 分析: 「聞こえ」は謙譲語。動作の主体は「父大臣」、申し上げる相手（客体）は「山ノ座主」。したがって、作者から山ノ座主への敬意。「給ひ」は尊敬語。動作の主体は「父大臣」。したがって、作者から父大臣への敬意。

・注意点：誰が誰に対して何をしているのか（主語と目的語）を正確に把握しなければ、敬意の方向を正しく判別することはできない。また、一つの文に謙譲語と尊敬語が両方含まれる場合（二方面への敬意）、それぞれの敬意の対象を混同しないよう注意が必要である。

起点・経由を表す格助詞「より」

・ルール：動作や状態の起点（～から）や、経由する場所（～を通って）、比較の基準（～よりも）、手段・方法（～によって）を表す。

・接続：体言や連体形などに接続する。

・例文：

・原文：いはけなくより

・口語訳：幼いころから

・注意点：現代語の「より」は比較の意味で使われることが多いが、古文では時間的・空間的な「起点（～から）」の意味で用いられることが非常に多い。本問も「幼い」という状態の始まり（起点）を示している。

不可能を表す呼応の副詞「え～ず」

・ルール：副詞 え が、下にある打消の語（ず、じ、まじ、でなど）と呼応することで、「～できない」という不可能の意味を表す。

・接続：「え ＋（動詞などの連用形）＋ 打消の助動詞」の形をとる。

・例文：

・原文：なかなかえ思ひ放たず

・口語訳：かえって見捨てることができない

・注意点：単なる打消（～ない）ではなく、能力的に無理である、あるいは状況的に不可能であるという強い意味合いを持つ。「え」を見たら、文末に打消の語がないか必ず探す癖をつけることが重要である。

打消接続の接続助詞「で」

・ルール：
前の動作を打ち消して次の動作に繋げる役割を持ち、「～ないで」「～ずに」と訳す。

・接続：動詞や助動詞の 未然形 に接続する。

・例文：

・原文：何ばかり祈り給へりとも見えで

・口語訳：どれほど祈祷なさっているとも見えずに

・注意点：格助詞の「で」（～で）とは全く異なる。打消の助動詞「ず」の連用形に接続助詞「て」が付いた「ずて」が変化してできた語であるため、それ自体に打消の意味が含まれている。

背景解説

擬古物語と『在明の別』

・解説：擬古物語（ぎこものがたり） とは、平安時代後期から鎌倉時代にかけて書かれた、平安時代中期の物語（特に『源氏物語』）の文体や筋立てを模倣して創作された物語群の総称である。本問の【文章Ⅰ】である『在明の別（ありあけのわかれ）』は平安時代後期の成立とされ、男装の女君や女装の男君が登場するなど、複雑なジェンダーを扱った特異な作品として知られる。

・関連事項：『在明の別』は『源氏物語』の影響を色濃く受けており、作中の登場人物の配置や、もののけが登場する場面の描写に『源氏物語』へのオマージュが見られる。設問において『在明の別』と『源氏物語』を比較読解させているのは、この文学史的な影響関係（本歌取り的な手法）を意識させるためである。他の擬古物語としては、『狭衣物語』や『とりかへばや物語』などが有名である。

『源氏物語』と「もののけ」（六条御息所）

・解説：本問の【文章Ⅱ】は、『源氏物語』の「若紫（わかむらさき）」の巻の一部、あるいは紫上系の病床における描写を踏まえている。（※解説内の「六条御息所」の記述から、生霊となった六条御息所が葵の上に取り憑く「葵」の巻や、紫の上に取り憑く「御法」などの巻の複合的な知識が問われている）。古文における もののけ（物の怪） とは、生きている人間の強い怨念（生霊）や死者の霊（死霊）が他人に取り憑き、病気や精神の錯乱を引き起こす現象、またはその怨霊自身を指す。

・関連事項：六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）は、光源氏への激しい愛憎と、正妻である葵の上に対する強烈な嫉妬から、無意識のうちに自らの魂が肉体を抜け出し、生霊となって葵の上に取り憑いた。本問で問われている「正体を隠しておきたかったが、苦しさのあまり姿を現してしまった」という心理は、誇り高い貴族の女性が己の醜い嫉妬心（生霊となった姿）を他人に知られることへの痛烈な羞恥心を表している。

加持祈祷（修法・調伏）と「山ノ座主」

・解説：平安時代の貴族社会では、病気はウイルスや細菌ではなく「もののけ」や「悪霊」の仕業であると信じられていた（怨霊信仰）。そのため、病人を治療するためには医師の投薬だけでなく、僧侶や陰陽師による 加持祈祷（かじきとう）

が不可欠であった。祈祷の儀式を 修法（すほう／ずほう）
と呼び、悪霊を呪文や法力で屈服させて退散させることを 調伏（ちょうぶく） と呼ぶ。

・ 関連事項: 本文に登場する 山ノ座主（やまのざす） とは、比叡山延暦寺（天台宗）の最高責任者である天台座主を指す。皇族や大貴族が重病に陥った際には、このように仏教界の最高位にある高僧が宮中や邸宅に招かれ、国家鎮護や悪霊退散のための大規模な祈祷が行われた。もののけが「童（よりまし＝霊を一時的に乗り移らせる霊媒の少年少女）」に乗り移って大声で騒ぐ描写は、当時の祈祷における典型的な光景である。

チャット応答

Q1: 敬語の種類と敬意の方向（地の文） をもっと詳しく教えて

敬語の種類と敬意の方向（地の文）の詳細解説

古文の敬語を正確に読み解くためには、「誰から誰に対する敬意か」を論理的に判定する必要がある。地の文における敬語の基本ルールを以下に整理する。

敬意の起点（誰からの敬意か）

地の文とは、会話文や手紙文以外の、物語の語り手が状況を説明している文章のことである。言葉を発しているのは作者であるため、

したがって、地の文における敬意の方向を答える際、「～からの敬意」の部分は常に「作者から」となる。

敬語の三種類と敬意の向かう先（誰への敬意か）

敬語は大きく三つの種類に分けられ、それぞれ敬意が向かう先（誰を高めるか）が異なる。

1. 尊敬語

・ 敬意の方向：作者 → 動作の主体

・ 判別のポイント：「誰がその動作をしているか」を見極める。動作主が身分の高い人物である場合に使われる。

2. 謙譲語

・ 敬意の方向：作者 → 動作の客体

・ 判別のポイント：「誰に対してその動作をしているか」「誰がその動作の対象になっているか」を見極める。動作を受ける相手が身分の高い人物である場合に使われる。

3. 丁寧語

- 敬意の方向：作者 → 読者
- 判別のポイント：動作の主体や客体に関わらず、読者に対する丁重な態度を示す。代表的な語に「はべり」「さぶらふ」（～です、～ます）がある。

本問の具体例による確認

本問の波線部を用いて、実際にどのように判別するかを確認する。

尊敬語の例（波線部a）

> 山ノ座主、慌て参りたまへり。……何ばかり祈り a
> 給へりとも見えで、

- 動詞：「祈る」
- 敬語：「給へ」（ハ行四段動詞「給ふ」・尊敬語）
- 主体（誰が祈っているか）：山ノ座主
- 結論：作者から 山ノ座主 に対する敬意。

謙譲語と尊敬語の併用の例（波線部b・c）

> 父大臣、かくはあらず、いかでかあべからむと、泣く泣く b 聞こえ
> c 給ひければ、

ここでは、一つの動作に対して謙譲語と尊敬語が両方使われている。これを二方面への敬意と呼ぶ。

- 動詞：言う（申し上げる）
- 敬語1（波線部b）：「聞こえ」（ヤ行下二段動詞「聞こゆ」・謙譲語）
- 客体（誰に申し上げているか）：祈祷をしている 山ノ座主
- 結論：作者から 山ノ座主 に対する敬意。

- 敬語2（波線部c）：「給ひ」（ハ行四段動詞「給ふ」・尊敬語）
- 主体（誰が申し上げているか）：父大臣
- 結論：作者から 父大臣 に対する敬意。

このように、地の文の敬語を読み解く際は、「誰の言葉か（地の文なら常に作者）」「どの種類の敬語か（尊敬・謙譲・丁寧）」「動作の主体は誰か」「動作の客体は誰か」を順を追って整理することが重要である。